山と博物館

第45巻 第5号 2000年5月25日 大町山岳博物館

「アザミの詩（うた）」乗鞍高原にて　撮影 大石 高志

薫

金原 義子

薫風に心を洗ふ時を得し　伊藤柏翠

風薫る良い季節になりました。行楽に大勢の人が出かけ、楽しく過ごしている様子を見受けます。私も今までに遠くや近くの山や高原などを、随分と歩き回りました。気の合ったお仲間と美しい自然の中で楽しい時間を過ごし、何となく力をため込んで、又働くという繰り返しだったように思います。

しかし、この二年程は母親の看病のためにそれができなくなってしまいました。そこで、これと思うものがあり、三時間ぐらいで往復可能な場所を狙って、出かけるようにしました。車では案外遠くまで行かれます。北小谷の道の駅にできた恐竜の像や、しょうぶ平の丁字桜も見ました。八坂村唐花見湿原のウメモドキは、芽吹きから花が咲き、実が生って色づき、葉が落ちて実が縮むまで何回か行きました。お馴染みになったウメモドキには声がけもします。「陽が当ってうれしいね。」「もう少し力んで早く赤くなりよ。」などとです。

鹿島川上流の大谷原も良い場所です。今年の一月に歩くスキーで行った折、雪が薫っていると感じました。鹿島の北槍、南槍、布引岳がくっきりと見え、澄み切った冷たい空気のなか、何の足跡もない真白な雪の上を、スキーで滑って行くと、ほのかな薫りが漂っていると感じたのです。日影には日影の雪の薫りが、冬陽を受けてきらきらと輝いている雪には少しさわやかな薫りを感じました。

木や花や水等と親しく向き合うようになって、それ等が持つ薫りに気付き始めました。静かに、じっくりと近寄ると薫りを送ってくれるように思います。良い気分です。心が洗われる思いです。高瀬川の流れも冬は黒っぽい水が黙々と流れ去って行くだけでしたが、今は石にぶつかり躍動して薫りをくれます。

自然の薫りを全身で受けとれるように、心のアンテナを研きたいと思っています。

（大町山岳博物館協議会委員）

山の大型猛禽イヌワシとクマタカ

文・写真　須藤一成

厳しい寒さと降り続く雪の季節、イヌワシペアは空中戦のようなダイナミックで華麗なディスプレイフライトを繰り広げる。冬期の貴重な晴れ間、雪面から反射する光を浴びた雄姿が青空にいちだんと映える。彼らを観察している間、僕は寒さを忘れ、幸福感に満たされる。

二月に入ると、巣造りの最終段階である。イヌワシペアは、切り立った渓谷の岩場に造られた巣へ、マツやスギの青葉をせっせと運び産座を整えている。最後に茅を運びこんで巣造りは完了する。いよいよ産卵である。一年のうちで最も寒い二月の初旬にイヌワシは産卵する。

イヌワシが巣造りから産卵に至る頃、クマタカの求愛ディスプレイフライトが最も盛んになる。翼と尾羽をお椀のように反り上げて悠々と飛行したり、オスとメスが重なり合うように接近して飛行するディスプレイフライトなど、僕の心に静かな感動が沸き上がる。

クマタカは谷あいの急峻な斜面にあるアカマツなどの大木に営巣する。イヌワシから一ヶ月以上遅い三月中下旬に産卵する。

イヌワシもクマタカも日本の山地帯に生息する大型の猛禽である。大きさは、イヌワシが全長八〇～九〇センチメートル、翼を広げると二メートル近くある。クマタカはイヌワシに比べて少し小ぶりであるが、それでも全長七〇～八〇センチメートル、翼開長約一・六メートルもある大きな鳥である。

両種とも、山野に生息する中小の野生動物を捕食する。ノウサギ・ヤマドリ・ヘビ・テン・リスなどさまざまな動物が獲物となる。イヌワシは飛翔力のある長い翼を持ち、草原状のオープンエリアでの狩りを得意とする。林の中ではこの長い翼が邪魔になるため、森林地帯での狩りには適さない。一方、幅が広く短めの翼を持つクマタカは、小回りを利かせて林の中を上手に飛び回り、森林地帯での狩りに適している。

森林に覆われた日本の山地では、クマタカのほうがイヌワシよりも有利である。しかしながら、イヌワシは落葉広葉樹林に育まれる豊かな動物層に支えられ、雪崩跡にできる高茎草原、あるいはカルスト地形・伐採跡などの草地、冬期に葉を落として見通しが利くようになる落葉広葉樹林帯を季節により使い分け、うまく日本の山地に適応している。

精悍な顔をしたイヌワシ。力の象徴である猛禽類もたくさんの生物に支えられて生きている。

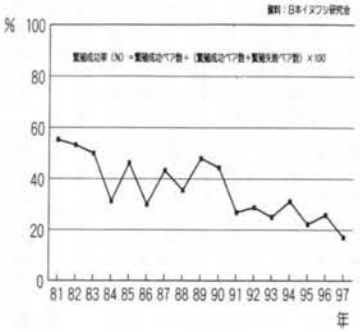
幅広く短い翼を持つクマタカ。樹林内を巧みに飛行することができる。

繁殖成功率の低下

一般に言われている「イヌワシやクマタカは生息数が少なく貴重な鳥であるから守らなければならない」というのは正確には現状を捉えていない。三〇～一〇〇平方キロメートルもの広い行動圏を持つイヌワシやクマタカは、もともと生息数の少ない鳥である。では何が危機的なのか？それは、近年の繁殖成功率の急激な低下である。

僕が主なフィールドとしている滋賀県内とその周辺に生息する九ペアのイヌワシの内、昨年繁殖に成功したのは一ペアだけだった。二つのペアは産卵し抱卵を続けたが、ヒナは孵らず繁殖は失敗した。多くのペアが産卵さえもしていない。

滋賀県周辺に生息するイヌワシの昨年の繁殖成功率は一一・一パーセントと非常に低い。全国各地の繁殖成績をまとめた日本イヌワシ研究会の資料によると、一九八一年の五五・三パーセントを最高に年々低下し、一九九七年には一七・〇パーセントまで低下している。海外のイヌワシの繁殖成功率が五〇パーセント前後であるのと比較してもかなり低い値である。



繁殖率が低下しているのはイヌワシだけではない。クマタカでも繁殖率が低下している。僕がクマタカの観察を始めたのは、今から二五年前になる。クマタカは、毎年卵を産みヒナを育てていた。現在はどうであろうか。毎年ヒナを育てるペアは珍しくなってしまった。二～三年に一度繁殖に成功すればいいほうである。

イヌワシとクマタカは、本来ならば毎年繁殖するのが普通である。近年では、繁殖しないペアが多くなっている。このことは、次の世代を担う若いワシやタカが育っていないということだ。このような低繁殖率が長く続くなら、イヌワシやクマタカは急激にその数を減らすだろう。

イヌワシやクマタカが繁殖できなくなっている原因は何か。長年の観察から言えることは、餌不足だということである。育雛期の巣の上に獲物がまったく無く、ヒナも親鳥も空腹状態になることが度々あるのだ。帰巣した雌親は、獲物の残がいを探すが、出てくるものはせいぜい干からびた骨くらいのものだ。ヒナに与えられるようなものではないが、雌親は空腹に堪えかねてその骨を飲み込む。

北米の繁殖成績の良いイヌワシでは、有り余る獲物が巣に運ばれる。日本では、ヒナを育てることはたいへんな重労働であり、飢え

との戦いである。親ワシの命さえ危険にさらされると言っても過言ではないだろう。翌年、連続して繁殖するだけの体力は残っていない。毎年連続繁殖するペアは減り、二～三年に一回となり、やがて繁殖しなくなる。これが一般的なイヌワシ・クマタカの繁殖率低下のパターンである。

十分な獲物が確保できる地域のペアは毎年繁殖を続け、ヒナを育てるには少し食物不足のペアは、ヒナを育てた翌年には繁殖できない。もう少し食物不足が進めば三年に一回の繁殖となり、ペアが食べるだけで精一杯の餌量では、まったく繁殖しなくなる。これ以上食物供給が低下したならば、生息できなくなる。

生後約6週のクマタカのヒナと雌親。アカマツの大木に造られた巣は、何年にもわたり使用される。

共に生きる

ここ一〇年程の間に、イヌワシやクマタカ、オオタカといった猛禽類の知名度はかなり高くなった。多くの人々が猛禽類に関心を持つことは、今後日本の自然を残していく上で非常に心強い。しかし、知名度を上げた原因の多くは、開発予定地に生息する猛禽類が見つかり、問題になったためである。中には猛禽類が開発の障害になっていると短絡的に決めつけ、猛禽類が悪者扱いされる例も少なくない。悪質な例では、開発予定地で見つかったクマタカの営巣木が、故意に切り倒される事件が実際に起こっている。こういう例がはっきりすることはめったに無いが、これは氷山の一角であろう。

山の自然環境の豊かさを計る指標として、イヌワシやクマタカが取り上げられていることをいつの間にか忘れてしまっている。イヌワシやクマタカの営巣地だけを残すことですべてが解決するとすり替えている節もある。営巣地だけが残っても、周辺の環境が壊されてしまえば、彼らはそこで生きていくことはできない。重要なのはどれだけの豊かさを残せるかである。

科学技術の発達に伴って、これまで手つかずであった奥山にまで開発の波がどんどん押し寄せている。開発の早さと規模の大きさに不安を覚える。果たしてイヌワシやクマタカは生き残っていけるのだろうか？

イヌワシは開けた場所で狩りをする。しかし、餌動物を育む森林が不可欠だ。

イヌワシやクマタカは、一日の大半を狩りのために費やしている。獲物はたやすくは手に入らない。人間の八倍以上と言われる視力で獲物を探す。一キロメートル以上も離れた山の斜面にいるノウサギやヤマドリを見つけ出してしまうのだ。彼らが急降下して行く先を、僕が双眼鏡で探しても獲物を見つけることはまったくできない。彼らが襲いかかってようやく、逃げ惑う動物をかろうじて見つけられる程度である。彼らの視力は驚異的である。

彼らの驚異的な視力を持ってしても、広大な山野の中で点のような獲物を探しだすことは簡単ではない。のんびりとしているように見える帆翔の時も、ゆったりと止まり場で休息しているように見える時も、常に獲物を探し続けているのだ。

獲物を見つけると、翼をすぼめスピードを上げて接近する。獲物に近づいた後の行動は、獲物がほ乳類か鳥類かで大きく変わる。ほ乳類であれば、相手の動きを見ながらスキを狙って、比較的ゆっくりと襲いかかる。鳥類の時にはスピードを落とさず、あるいはさらにスピードを上げて真っ逆さまに急降下し、かすめるように襲いかかる。

狩りの成功率は、獲物がほ乳類の場合はかなり高いが、鳥類では非常に低い。ヤマドリや猛禽類のトビが襲われるのを何十回と観察しているが、狩りに成功するのを目撃したのはわずか三回だけである。

山の斜面にヤマドリを見つけたイヌワシは、翼をすぼめ一直線にヤマドリに向かった。ヤマドリはイヌワシに捕えられるより一瞬早く、猛烈なダッシュで足元をすり抜けるように飛び出した。猛烈なスピードで沢を下り、追ってくるイヌワシを引き離して林の中へ逃げ込む。狩りの成否は、ヤマドリが地上から飛び立つ一瞬で決まる。イヌワシの接近に気づくのが遅れ、ほんの一瞬でも飛び立つのが遅れたならば命はない。

黒い全身に鮮やかな白斑。新緑をバックに飛翔するイヌワシの幼鳥は、まぶしいほど美しい。

猛禽も空腹を満たさなければ生きてはいけない。狩るもの狩られるもの共に生死をかけた攻防だ。鳥の王者と称されるイヌワシやクマタカは、たくさんの動物たちによって生かされているのだ。

イヌワシやクマタカが自由に大空を飛翔する姿は美しい。その姿に見せられて、僕は彼らに会うために山へ通う。いつまでたっても彼らの生態を知り尽くすことはできない。彼らも環境に応じ、ケースバイケースで生きている。常に新しい発見があり、予想もしなかったことが起こる。イヌワシをはじめ猛禽類は僕にとってライフワークである。新しい出会いが待っている。

春は、山歩きの最も楽しい季節である。残雪の上を冬眠から目覚めたツキノワグマが歩き、芽吹き始めた柔らかい草をカモシカが食べている。空にはイヌワシが舞い、森の中ではクマタカが獲物の出現を待つ。たくさんの動物たちが息づく自然は素晴らしい。

（動物写真家）

ニホンカモシカの呼び名と語源
―百六十三種の分類―（完結編）②

北村嘉寳

（五）磯系統

49、イソノトリ

一般にイソとは、海などの水際で石・岩の多いところをいうが、地方によっては、切り立った岩壁や、断崖絶壁の岩山から崩れてくる土砂や、雪崩の跡などもイソといい、カモシカはこのような場所にも棲む。一方、トリは鳥のことで、カモシカの鳴き声が、けたたましく鳴くカシドリ（カケスともいう）に似ているので、磯にいる鳥に似た獣という意の隠語である。高知〔幡多〕

㊸白井邦彦「山村猟師語彙」『全猟』（日本狩猟倶楽部、一九五六～一九五八年）

50、イソ

「イソノトリ」の下略称で隠語。

文献㊸に同じ。

（六）岩系統

51、イワシカ（イハシカ）

イワは岩、つまり岩石地をいうが、カモシカは、このような場所を好んで居付くので、岩場に棲む鹿という意で名付けられた方言。静岡〔周智〕・山梨〔南巨摩〕・長野〔上伊那・下伊那〕・大阪・兵庫

註…大阪や兵庫にはカモシカは棲んでいないが、他県からの入猟や、他県への出猟時に知った「イワシカ」という呼び名が、当該地域の狩猟社会に定着したのであろう。

㊹伊藤圭介『日本産物志』（一八七六年）

52、イワシシ（イハシシ）

岩場にいる宍（肉）という意の方言。群馬・山梨・静岡〔富士〕・長野〔上伊那・飯田〕・滋賀

文献㉚に同じ。

53、イワトリ（イハトリ）

岩場のイワと、「イソノトリ」で述べたトリとを組み合わせて、岩鳥と名付けたもの。今ひとつは、カモシカは岩場でたやすく捕らえられる獣なので、岩捕りと名付けた方言である。神奈川〔中・足柄上〕・静岡・岐阜〔大野・吉城〕・奈良〔吉野〕・和歌山・大分～宮崎〔傾山〕

文献㉚に同じ。

54、イワ

「イワシカ」、「イワシシ」、「イワトリ」と同義語で、イワはこれらの下略称であろう。分布地域は明らかではないが、略称であれば、上記3種の呼び名の分布地域か、その周辺府県ということになる。

㊺岸田久吉「山岳に生きる動物たち」『山岳』（日本山岳会、一九六四年）

55、イワススメ

カモシカが、岩から岩へと跳ぶときに、足を振るわす様子が、雀の羽ばたきに似ていることから名付けられた隠語（愛称）。長野〔南佐久〕

岩科小一郎氏の書簡による。

56、ニワシシ（ニハシシ）

ニワ（ニハ）は山岳用語では、山の上部や中腹によくあるこじんまりとした平坦地のことをいい、草食獣にとっては恰好の遊び場所となる。ニワシシは、ニワでよく見かけるシシという意の隠語。

今ひとつは、群馬県への出猟者が「イワシシ」を、ニワシシと聞き誤り、そのまま地元（新潟）に定着したものと考えられる。新潟〔中蒲原〕

㊻小林存『越後方言考　高志路1（3）』（高志社、一九三六年）

（七）岳系統

57、ダケニク

岳（標高が高い多雪の奥山）に棲む「ニク」という意の隠語。棲む岳によっては、毛の先端が白っぽいもの、赤茶化たものもいる。長野〔下伊那・西筑摩〕

㊼『狩猟聞書　蕗原2（2）』（伊那富民俗研究会）

58、ダケ

「ダケニク」の下略称。分布地域を明記した文献は見当たらないが、ダケニクと同一地域と考えられる。

文献㊺に同じ。

（八）里系統

59、サトニク

雪の少ない里山に棲む黒毛のカモシカをいう方言。長野〔伊那〕

文献㊼に同じ。

60、サト

「サトニク」の下略称で、分布地域はサトニクと同じ長野地方と推定される。

文献㊺に同じ。

（九）その他の場所系統

61、サッチシ

マタギ達は、山言葉を作るときや、山言葉を忘れたときなどに、手っ取り早い方法として、里言葉に【ナ】あるいは【サ】をつけて山言葉にした。

サッチシは当初、サシシとしたのが語呂の関係で、サッシシ→サッチシに変わったものと考えられる。

一方、冬になるとカモシカは、沢端（マタギ達はサッパタと呼ぶ）に棲むので、沢シシ転じてサッチシと呼んだ可能性が高い。新潟〔岩船〕

㊽森谷周野『奥三面郷狩猟習慣調査報告書』（一九六一年）

62、アオザイ

マタギ言葉であるが、語源を明らかにした資料は見当たらない。推測するに、新潟県北魚沼郡の大白川地方では、岩石の上などが青く凍っている所を、アオザイと呼んでおり多分、新潟地方に出猟したマタギ達が、岩場の上に佇立するカモシカを見て、里言葉のアオザイを呼び名として転用したのであろう。新潟〔北蒲原〕

文献②に同じ。

五、角系統の呼び名

63、イッポンヅノ

カモシカの角は、シカと違って枝分かれがない一本立ちなので、隠語としてイッポンヅノと呼んだもの。大分～宮崎〔祖母山〕

㊾加藤数功『祖母・傾山群における熊の過去帳とカモシカ』（祖母・傾自然公園開発促進協議会、一九五八年）

64、イッポンヅノのシカ

語源は「イッポンヅノ」と同じで、シカと組み合わせた隠語。宮崎〔西諸県〕

文献㉖に同じ。

65、イッポンヅノのニク

「イッポンヅノ」と、「ニク」とを組み合わせた隠語。滋賀〔甲賀〕

㊿中井一郎『比良山の自然譜』（ナカニシヤ出版、一九七七年）

（三重県在住）

本文に関する問合せ先
〒五一九―三四〇三　三重県北牟婁郡海山町上里三七六
電話　〇五九七三―六―一三一四

山と博物館第45巻第5号
発行　〒　長野県大町市大字大町八〇五六―一
大町山岳博物館
TEL〇二六一―二二―〇二一一
印刷　大糸タイムス株式会社
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―二三九三
二〇〇〇年五月二十五日発行